

博物館展示をよりよく理解するための 2つの教育プログラム実践

Two Educational Program Practices to Better Understand Museum Exhibits

広 谷 浩 子

HIROTANI Hiroko

要旨

展示とは、展示企画者と展示見学者の間のコミュニケーションである。この観点から、都留文科大学における博物館展示論の授業で、情報の送り手（展示企画者）と受け手（展示見学者）の双方を体験する2つの教育プログラムを実施した。

- ① 展示見学ポートフォリオ作りでは、写真によって可視化された自己および他の受講生の展示見学パターンを把握した。その結果、様々な見学パターンに対応した展示のあり方を考えることができた。
- ② 情報の送り手が伝えたいことを展示で表現するマイミュージアムづくりでは、①の結果をもとに、「***を伝えたい展示」の企画作製をめざした。作られた展示作品は、おもしろさ・美しさだけでなく、意図の明解さが表れるものが多かった。

以上より、2つの教育プログラムを緊密に結びつけて実施した結果、受講生には、展示見学と企画作製を展示企画者の立場で一貫して行えるような実践力が養われることが明らかになった。

<キーワード> 学芸員養成課程、博物館展示、来館者研究、展示見学ポートフォリオ、展示企画

はじめに

その昔、財力を使って世界中から集めた収集物をかざる「驚異の部屋」として始まった博物館は、誕生の時から「展示」が大きな部分を占めていた。時代とともに社会における博物館の位置づけは変わり、博物館事業における展示の果たす役割も変遷している。展示企画者の意志だけではなく、来館者の要望も反映した博物館事業として、展示も位置づけられるようになったのである。本論文においては、展示の企画者と展示の観覧者という異なる2つの立場を結びつけて、展示の意味を問い直したいと考えた。

ここでは、都留文科大学の学芸員養成課程でおこなった教育プログラムの実践結果を紹介する。2012年の博物館法施行規則の一部改正によって、大学における博物館学芸員養成課程では、カリキュラム変更が必要となり、博物館資料保存論や博物館展示論などの新科目が増えた [1]。学外の講師（多くは博物館の現役学芸員）による実践的な内容の講

義が多くなってきたのである。筆者も神奈川県立生命の星・地球博物館で学芸員として勤務しながら、2014年より、都留文科大学において博物館展示論・博物館資料保存論の講義を行ってきた。通常の講義だけでなく、博物館資料を実際に扱ったり、展示を企画したりする、実習形式のプログラムを加えて進めている。

博物館展示論の講義において、2つの教育プログラムを導入したところ、受講生の反応や事後のレポート等に記された思考過程から、学生が博物館展示への理解を深めていく様子が把握できたので、これを報告する〔2〕。

教育プログラムの実際と進め方手順

筆者は講義の中で「展示はコミュニケーション」という視点〔3〕から、主に展示を企画する博物館人の立場からの博物館展示論を展開し、展示企画の実習を行ってきた。博物館を訪れる来館者の行動は、展示物そのものの魅力だけでなく、それらの配置や密度、動線あるいは照明など様々なものと深くかかわって変化する〔4〕。講義で強調したのは展示をとらえる2つの立場、利用者・観覧者の立場と企画者の立場である。これらを対比させることで、博物館展示をより具体的实际的に扱うことができると考えた。講義では、博物館展示をめぐる歴史、展示の基本概念、基本的展示技術を解説することと並行して、2つの実習を導入した(図1)。

第1の実習は、博物館展示の見学を写真記録と解析によってまとめる展示見学ポートフォリオ作成実習である。自身の展示見学についてより深く分析し、さらには、博物館の利用者が博物館の事業展開に与える影響にまでつなげていくことができる。

第2の実習は、博物館展示を企画・製作する、マイミュージアム作成実習である。展示論で学んだ、博物館展示のありかた、展示技術、来館者動態把握などをもとに展示理論のまとめとして、各自が展示づくりにとりくむ。

さらに、実習1と実習2を有機的に結びつけるために、第1の実習後のアンケート、第2実習の企画書作成、展示作品の相互評価などを導入して、受講生が展示を見ることと展示を作ることの両方を関連づけながら実習にとりくめるよう、プログラムをつくり実施した。

各実習の手順の詳細を以下に示す(図2)。

1. 利用者・観覧者を理解するために：展示見学ポートフォリオ作り

ポートフォリオとは、ある活動のようすを示す動画・写真などをファイルに入れて保存・記録する手法で、採用試験の素資料や自分の仕事のまとめなど様々な場面で活用されている。神奈川県立生命の星・地球博物館の田口と協同研究者(大島、清水、志澤)は、博物館の展示見学過程を印象に残った展示物の写真によって経時的に記録しまとめるポー

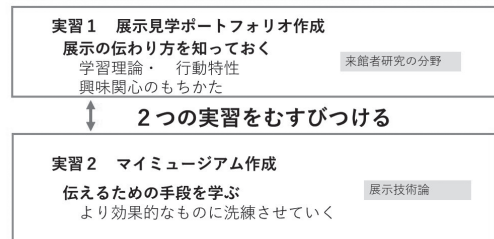


図1 博物館展示論の2つの実習の位置づけ

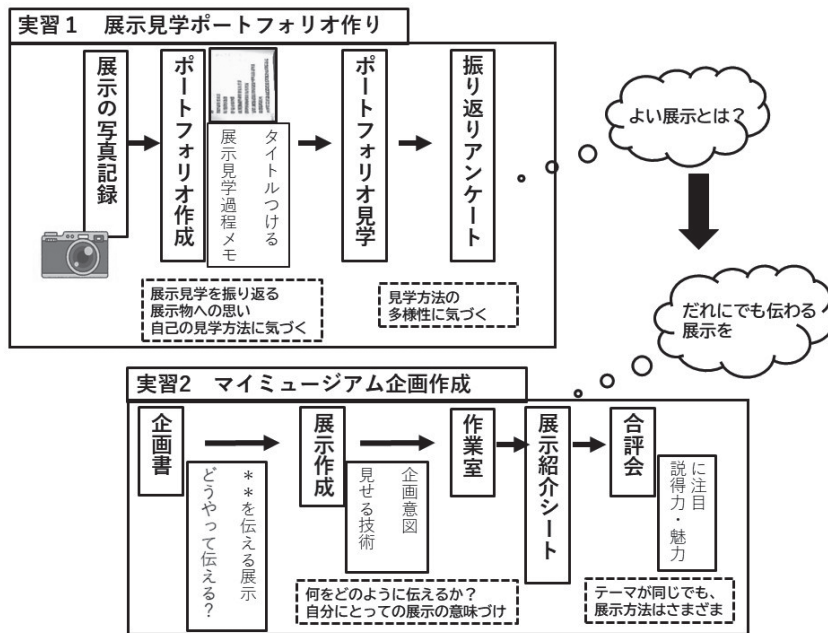


図2 実習1と2の内容とねらい

実習1と実習2の詳しい過程を時系列で示し、各段階での受講生の反応を点線の枠内と雲マーク内にまとめた。

トフォリオ手法を提案し〔5〕〔6〕、博物館主催講座や博物館学履修学生の見学実習〔7〕、教員研修や教職課程在生の実習〔8〕で行って成果をあげてきた。さらに、田口と下出は、展示室内の展示物配置とポートフォリオを対応させながら、展示室内の来館者の行動を詳しく分析し、モニタリング・ツールとしてのポートフォリオの有効性を論じている〔9〕。筆者は、田口らと共に行った博物館主催講座で、参加者の展示見学行動を詳しく観察し、この方法が自分の展示見学過程を振り返る上で有効であることを実感した。

筆者はこれまで、博物館展示論の講義の中で、来館者研究の動向を解説し、利用者・観覧者の展示見学の様相をよく理解することが、魅力ある展示企画につながることを強調してきた。そこで、受講生自身が来館者となって展示見学を体験しその様相を理解するために、ポートフォリオ作成実習に取り組んでもらうこととした。

展示見学は、2021年4月27日より5月16日の20日間に、ミュージアム都留（都留市上谷1-5-1）において受講生各自が行った。受講生は、同じ仕様のデジタルカメラ（Nikon coolpixW150）を使い、フラッシュやシャッター音なしで40分間にわたり展示物の撮影をした。見学にあたって筆者は、「展示室を自由に見学しながら、「おっ」と思ったものを撮影する。写真の見栄えにこだわるのではなく、撮影は展示見学のメモ代わりにとらえること。」と指示し、それ以降の見学はすべて受講生の自主性にまかせた。

受講生は撮影した写真をインデックス画像の形で印刷して、5分ごとの区切りで切り離して大判の紙に貼り、展示見学の写真記録を経時的に表わすポートフォリオを完成させた（図3）。このポートフォリオをもとに、写真記録へのコメント、展示見学全体を見渡してのタイトルづけ、他の受講生のポートフォリオとの比較（見学会）などの解析を行い、そ



図3 展示見学ポートフォリオ実習のようす

実習で撮影した写真をインデックス画像で印刷し、印刷した画像を5分単位で区切りカットして、紙に貼り付けていく。

の結果をアンケート回答形式のレポートにまとめ提出した。

2. 展示の企画と実践のために：マイミュージアム作成

展示を企画する上での考え方や展示技術の基本などの講義を終えた時点で、マイミュージアム（私の博物館展示）作成実習を行った。手順は表1のようになる。

表1 マイミュージアム作成の手順

① 展示物の制約
コルク板（35cm×25cm程度）の上に展示を展開する
展示物の厚みは、5cm程度までとする
ワイヤーを使ってぶら下げるので、重さは500g程度までとする
② 展示物決定 展示企画書を書く
企画書の書式に従い、テーマ、タイトル、展示物、配置図の順に記入する
③ 展示物作成
企画書にしたがって、つくりあげる
④ 展示紹介カード記入
展示テーマと注目点を明示する
⑤ 合評会
紹介カードと展示物をみながら、展示物の魅力・展示物の説得力の2点から、投票をおこなう。

- ① 展示物の制約：作成する展示物には、大きさと素材に制限をもうけた。用意した展示板は35cm×25cmであり、厚みは5cmまで、重さは500gまでとした。
- ② 企画書作成：展示テーマを考えて、展示物を決定したら、展示企画書を書いて提出する。企画書には展示で伝えたいこと、タイトル、展示構成、展示物の配置などを細かく記入してもらった。
- ③ 展示物作成：企画書にもとづき、展示物を作成する。計画通りに進んでいるか否かのチェックは対面だけでなく、遠隔での作業報告会を企画しその中で行った。
- ④ 展示紹介カード記入：展示によって伝えたいこと（展示テーマ）と展示で注目すべきところを明示したカードを記入し、展示ボードに貼り付けた。
- ⑤ 合評会：完成作品をすべて展示して、相互に見学評価する時間を持つ。展示物そのものが持つ「魅力」と展示が企画意図と合致する「説得力」の2つの基準から、各自がすぐれた作品に投票を行った。

結果

1. 展示見学ポートフォリオ作り

できあがったポートフォリオの一部は図4の通りである。これにより、展示見学のさまざまな様相がわかった。撮影した画像の枚数だけに注目しても、40分の観覧時間に200枚以上の写真をとっている人もいれば、わずかに20枚という人もいた。経時的にみていくと、展示見学の前半に撮影数が多く次第に少なくなっていく、最初が少なく次第に多くなっていく、比較的一定の割合で撮影するなど、いろいろなパターンがあった。撮影した画像の種類からは、小さなものばかりを撮影する人、絵画の画像が大半を占める人、色あいにこだわる人など、展示物への興味関心の対象も類推できた。

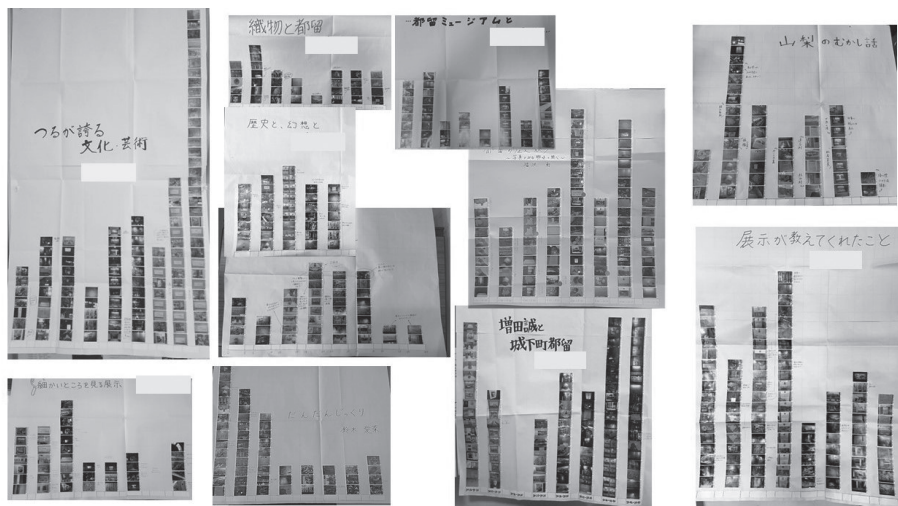


図4 様々な展示見学ポートフォリオ

実習で完成させたポートフォリオの実例。様々なパターンが認められる。

自分の展示見学につけたタイトルは多様で(表2)、展示見学過程をまとめたものと展示内容に言及したものとがほぼ半数ずつになった。展示見学過程のまとめでは、自分の惹かれるものへの気づきや展示見学の方法の提案、時間配分のこと、展示の見せ方への考察などがあげられていた。一方、展示内容に言及したタイトルでは、博物館の展示コンセプトや特に印象深い展示をとりあげてまとめるなどの傾向が認められ、展示見学を通して自分なりに「編集した」博物館展示について語られていた。

受講生全員のポートフォリオを掲示して行った見学会では、他の受講生のポートフォリオを見ながら、同じ展示を見学してもさまざまな見方があると実感することができた。

見学ポートフォリオ作成とその後の解析によって受講生にどんな学びがあったのか、4つの質問に答える形でレポートにまとめ提出してもらった。質問項目と回答の概要は表3の通りである。

質問1から3への回答から以下のようなことがわかった。展示見学ポートフォリオの作成とその後の解析を通し、展示見学において自分が何を感じたか、どんな展示にひかれるのかなど、自分自身の展示の見方が明らかになった。この時に写真という媒体の特性(色、形がひと目でわかる)も重要な役割を果たしていた。展示の見せ方、ストーリー、

表2 展示見学ポートフォリオのタイトル

見学過程に着目 23名	展示内容に着目 21名
私の好きポイント	都留の歴史と増田誠展
私の知らない都留	増田誠の見た風景
やっぱり絵画が好き	都留市の歴史と魅力
心奪われた場所	身近な歴史と文化を知る
伝わらない	歴史と、幻想と
細かいところを見る展示	都留が生まれた景色
Memory Museum in Tsuru	都留市の歴史と文化
都留ミュージアムと展覧方法	都留の歴史
私の好きな都留の歴史と絵画	ほぼ谷村の歴史
都留を知る40分	つる歴史探訪
わたしの景色	増田誠と城下町都留
展示が教えてくれたこと	ミュージアム都留探訪
全体を楽しみつつお気に入り部分を pick up	ミュージアム都留鑑賞記録
怒涛の追い上げ	山梨のむかし話
だんだんじっくり	圧巻の迫力
人目を憚る	歴史と絵画
新たな視点での観覧	都留の歴史と増田さん
色に惹かれる	展示風景を伝える～増田誠常設展～
展示に魅せられました	都留が誇る文化・芸術
展示の見せ方	織物と都留
わたしの興味の視線	立体感
My Photo Museum	
都留の歴史散歩～写真でみる興味・関心～	

表3 展示見学ポートフォリオ実習の事後アンケート回答

ポートフォリオのタイトル「*****」

(1) 展示を見学し、写真記録を作って気がついたこと

写真を撮ることへのこだわり：抵抗感、細部に注目、記録か直観か？

写真記録だから気づいたことがあった：色へのこだわり

自分の好きなものがわかった：身近な実物、写真

展示企画の意図に気づく：見せ方、ストーリー、動線

(2) 私の展示見学タイトルの解説

自分の見学パターン、展示企画者の視点、展示品をどうとらえたか など

(3) 受講生全員の展示見学ポートフォリオの掲示（見学会）を見て考えたこと。自分の見学パターンとの違いを中心に

一見してわかることは、写真枚数と時系列変化：様々なパターンがあった

撮影内容まで詳しく見ると：興味関心の対象は千差万別であった

撮影方法を見ると：接写や引き撮影、撮影角度から見学者のこだわりが予想できた

展示物のどこに注目するか：色、形、大きさ、物あるいはパネル内容など様々であった

展示室全体の観覧方法：順路に沿って一定時間、速度変化、行ったり来たり

(4) 来館者の展示見学のパターンから、展示のとらえ方や学び方がわかる。これをもとに展示を企画する場合、何をしたらいいか？

詳細は別紙（表4）へ

動線など、企画者の立場を理解しながら展示見学ができていることも注目に値する。また、他の受講生のポートフォリオ見学では、写真の枚数や時系列変化の違いだけでなく、撮影した展示物や撮り方にも注目していた。受講生は、展示見学者の興味関心の対象は非常に多様であることにあらためて驚き、自分の展示見学体験と比べながら見学者の心の動きを想像して強く印象づけられていたのである。

アンケートの質問4は、実習2への導入となるように設定した。展示見学の様相（時間配分、見学方法、展示内容のとらえ方など）が受講生によってさまざまであることを認識したところで、新しい展示を企画する場合、どんな配慮が必要かを尋ねたのである。展示見学の視点の違いとは、物のとらえ方や学びのパターンの多様性であり、博物館ではこれをもとに、来館者の学びを進めるような展示を企画することが可能になる。質問4への回答は、表4にまとめた。展示見学の視点多様であることを前提に書かれた提案には、◎をつけた。

表4 展示見学の多様なパターンに対応した展示企画とは？(受講生の回答)

	見学視点の多様性 に対応
目をひいてわかりやすいもの 際立たせる演出	
何度も見方をかえて楽しめる展示	◎
展示間のつながりを大事に	
いろいろな人で内容を検討	◎
全員を対象にしたゾーンを設置、同時に「**に関心のある人はここへ」とパンフレットなどで誘導 オンデマンド展示	◎
展示観覧の早い人にも内容が伝わるような展示	
分野や趣向の異なるものを展示する	◎
伝えたいことの明確化、伝える方法を検討する	◎
説明の多い展示 v s 説明少なく考えさせる展示	
巨大な展示を活用する	
最後まであきさせない展示	
モニタリングが大切、一人では偏りが生じやすい	◎
ポートフォリオによって、来館者の興味関心の対象が可視化される	◎
展示解説文に画像・イラストを加えると理解が深まる	◎

展示見学のパターンの多様性に特に注目した回答は◎で示した。

企画段階で様々な視点を持った人が展示内容を検討する、何度も見方を変えて楽しめる展示、興味関心に合致したものを抽出して紹介するなど、具体的かつ実行できそうな提案が数多く出されていた。展示を来館者として楽しむだけでなく、企画者としてみていく姿勢ができていることがうかがわれた。

2. マイミュージアム作成

実習1からの導入を受けて、実習2においては、来館者のさまざまな展示見学視点に応える展示企画の立案から実習を開始した。展示見学者に伝えたいことを明確に示すことを最重要事項とし、「****を伝える展示」を作るために、展示物の選択・展示構成・展示物の配置などを企画書に書き、提出することとした。企画書の書式と提出された企画書の例を図5に示した。

この段階で、受講生はすでに、展示物と演示具・パネル・解説ラベル・照明・音などの展示コンポーネントの使い方についての基本事項を学び、知識上は展示をよく理解してい

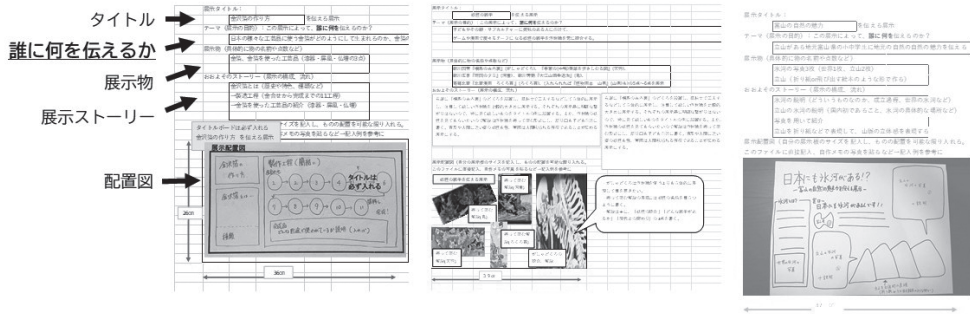


図5 マイミュージアム企画書

実習2の開始時に提出する企画書の実例。左端に記入項目を示した。実習1での思考過程を振り返り展示によって伝えたいことを端的に表せるよう回答欄を工夫した。

る。それでも、企画書にしたがい展示作成を始めると、不測の事態が生じ、展示意図も不明確になりがちである。また、企画書には、展示テーマを設定するに至った動機が書かれていないため、主張が弱い印象をうけた。これを補完するため、ZOOMを利用した作業ワークショップを数日間にわたって開催し、個々の受講生に対して、企画内容の確認と展示作成へのアドバイスをとおこなった。その結果、展示企画の意図をさらに明確にさせて、魅力的な展示物作成に近づけたのではないかと考える。完成作品は図6に示した通りである。受講生は、展示企画の意図と展示の中で特に注目すべきポイントを「紹介カード」に記入して、作品に添付した。

完成作品の合評会(図7)で、受講生は、展示物と紹介カードをみながら、展示の「魅力」と「説得力」を評価する投票を行った。展示の見学者と企画製作者という2つの立場から投票を行ったのである。42作品のうち、28作品が両方の評価を獲得し、魅力だけの評価は5作品、説得力だけの評価は8作品であった。受講生にとって、評価できる作品とは、きれいでおもしろく魅力的なだけでなく、伝えたいことを的確に伝えている説得力のある作品だということになった。

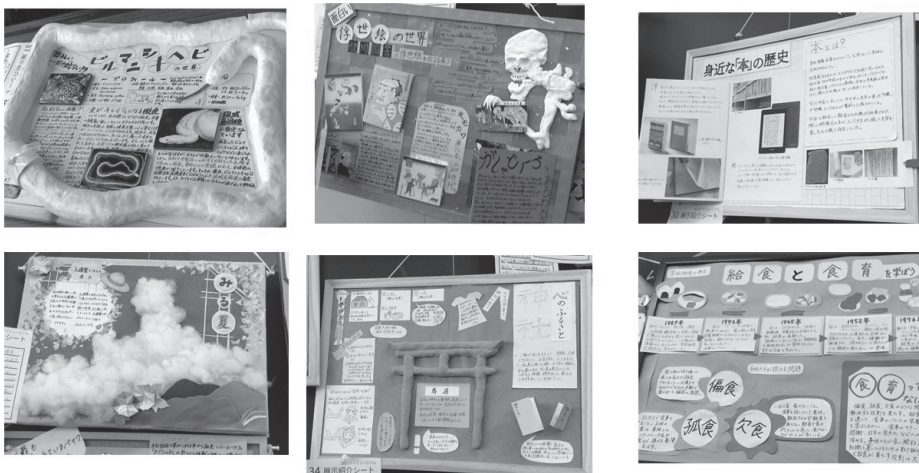


図6 マイミュージアム完成作品の実例

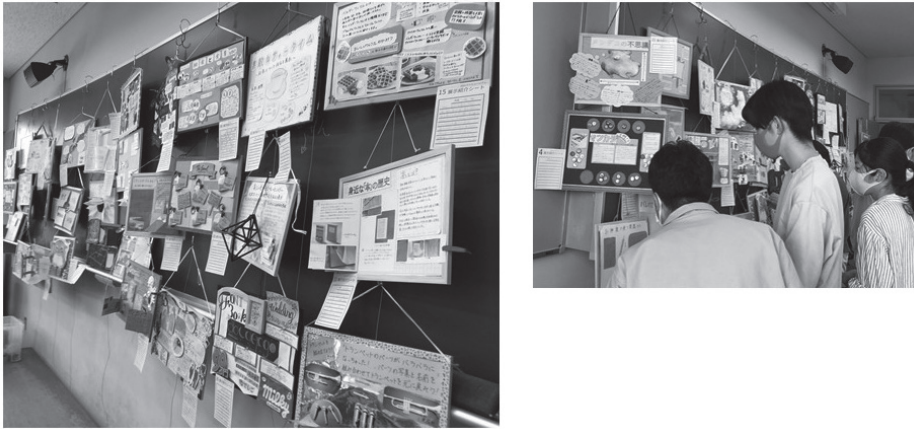


図7 マイミュージアム合評会のようす
教卓周辺に掲示された作品（左）を熱心に見学する受講生（右）

考察

博物館展示論における2つの実習は、「展示見学ポートフォリオ作成によって見学者が展示をどのように見ているか実体験とともに考察し、それに対応した新しい展示を企画製作する教育プログラム」とまとめることができる。講義から得られた知識（博物館来館者の学習認識パターンや博物館展示のコンポーネントなど）を実際の博物館活動の中で活用するための実践的で具体的なものにすることができたと考える。

さらには、社会教育施設としての博物館の展示にもとめられる生涯学習の要素を、「展示は企画者と見学者の間のコミュニケーション」ととらえて、企画者は展示の意図をどうやって見学者に伝えるかを展示企画のメインテーマとした。

実習全体を通しての受講生の態度は、非常に熱心で積極的であった。写真撮影による展示見学とまとめ、展示企画作成、オンライン作業ワークショップ、合評会のどれもがあまりなじみのない内容だったと思うが、それぞれの意味づけをよく理解して取り組んでいた。

対面での詳しい会話や深い議論などは難しい状況であったが、ポートフォリオ見学会・展示作品合評会の両方で、予定した時間をすぎても熱心に見学したり身近な友人と会話したりする姿が見られた。2つの実習が受講生の興味関心に与えた影響は大きかったと思う。

また、展示見学ポートフォリオ作成実習後のアンケートレポートやマイミュージアム合評会の投票結果からは、受講生が来館者として展示を楽しむ以上に、博物館の展示活動にかかわって展示効果や展示ストーリーを意識していることがうかがわれ、今回の教育プログラムには、一定の効果があったことが明らかになった。

展示見学ポートフォリオについては、今回のような見学者の視点だけでなく、博物館経営や教育分野などの視点からも活用の余地がある。実習までの準備状況や写真の整理などの実作業に時間がかかりすぎるという難点をクリアしながら、今後は、視点を変えての実習にも取り組んでみたいと考えている。

謝辞

本論文は、2014年から都留文科大学で行っている博物館展示論の講義や実習における様々な試みがもととなっている。筆者を大学にご紹介くださり、講義・実習の遂行をいつも支えてくださる北垣憲仁地域交流研究センター教授にお礼申し上げる。

展示見学ポートフォリオ実習のためには、写真撮影のできる展示場が必須となる。受講生がストレスなく出かけられる展示場を探し「ミュージアム都留」に至った。都留市教育委員会 生涯学習課ミュージアム都留担当の滑川未来さんには、受講生による展示見学すべての過程でご支援いただいた。深く感謝する。

本研究は、JSPS 科研費 JP18K01112 (代表：田口公則) の助成を得て行った。

参考文献

- [1] 岡庭義行「博物館法改正と学芸員養成」『帯広大谷短期大学紀要』49 pp.1-10、2012
- [2] 広谷浩子「展示をつくりあげるための2つの教育プログラム実践」『全日本博物館学会第47回研究大会発表要旨集』pp.45-46、2021
- [3] K マックリー「博物館をみせる 人々のための展示プランニング」(井島・芦谷訳) 玉川大学出版会、東京、pp.267、2006
- [4] 広谷浩子「来館者の行動観察をもとにした博物館の利用状況の分析」神奈川県立博物館研究報告、34: 55-60、2005
- [5] 田口公則・大島光春「展示見学における写真ポートフォリオ作業の導入」『全日本博物館学会 第40 回研究大会発表要旨集』pp.27-28、2014
- [6] 田口公則「展示見学ポートフォリオづくりの講座実践」『自然科学のとびら』22 (4) pp.30-31、2016
- [7] 田口公則・清水玲子「展示見学ポートフォリオづくりを用いた協調的ワークショップの試み～博物館見学実習を事例として～」『明治大学学芸員養成課程紀要』30 pp.149-154、2018
- [8] 志澤泰彦・田口公則「博物館との連携による理科教育法の授業が教職課程学に与える効果」『日本大学生物資源科学部「教職課程紀要」』2 pp.1-7、2019
- [9] 田口公則・下出朋美「展示見学ポートフォリオ」の画像を用いた来館者行動の分析：どのように巡り、何を見て、感動したか『全日本博物館学会 第46回研究会発表要旨集』pp.63-64、2021

Received : September, 29, 2021

Accepted : November, 2, 2021